

# 市川三郷を盛り上げよう！～観光客を増やし隊～

山梨英和高等学校 2年3組 遠藤まな 新津日咲 前田遥香 村松明奈

## Abstract

本研究は、深刻な財政危機に直面した山梨県市川三郷町の観光に焦点を当て、町の活性化について検討したものである。2023年、市川三郷町は財政非常事態宣言を発表した。深刻な財政危機には、人口減少と高齢化が原因と考えられる。この現状を打破すべく私たち高校生でもできることを検討し、探究を始めた。探究を始めるにあたり現状を知るため、市川三郷町役場政策推進課の方にお話を伺うと、市川三郷町は観光客が少なく、町内の施設の維持費、また赤字の施設でも補助金で建てられた施設は簡単に取り壊すことができない、という深刻な現状を目の当たりにした。財政とは異なる観点から町おこしへのアプローチを検討し、観光による地域活性化を図った。市川三郷町の認知度を調べ、大学教授による町おこしについての模擬授業を通して、具体的に私たちに何ができるのか方針を定めた。そして、認知度を調べるためのアンケートの結果から町外の人に市川三郷町を発信し、財政改善や町民自身が町の魅力を再認識するための一助として雑誌「#きっと、市川三郷が好きになる。」を作成した。

## 1.研究背景

市川三郷町は山梨県の峡南地域に位置する人口1万4000人ほどの小さな町。はんこ、花火、和紙が特産品として有名であり、毎年8月に行われる神明の花火大会はおよそ20万人が訪れる県内最大級の花火大会など、歴史と文化、そして町民の温かさが魅力の町である。散歩をしていると町民の方が話しかけてくださったり、町のスーパーでは町民同士がたわいのない話をしている。そんなのどかで、自然が豊かな町でメンバーのうち2人が生まれ育った。町内の小学校では地域学習を行ったり、町内に住む高齢の方から昔の遊びを教えてもらい、「昔遊び体験」が授業の一環として行われたりするなど、地域の方々と関わる機会が何度かあった。しかし2人とも甲府の中学校に進学したため、町との関わりが薄くなっていった。2023年、突如市川三郷町が財政非常事態宣言を発表した。この宣言は、人口減少、高齢化による税金の減少、社会保障費の増加など様々な問題を抱え町の借金が増大しているため、このままの状況だと町は破綻してしまう、その前に町民にこの危機的状況を理解してもらい、町も今まで以上に様々な政策を進めていく、ということを示すためのものである。この宣言は突然出されたため町民も混乱した。このまま町がなくなってしまうのではないかと思います、私たち学生でも町のために何かできることはないかと考え、研究を始めた。最初は町の財政について調べ、この非常事態宣言を解除するにはどうすればいいのか解決策を町に提案する、という目標を立てて活動していたが、財政や町の問題に関わるのは学生にとって厳しく、私たちができることを考えた結果、市川三郷町へ来る観光客を増やして町の観光を盛り上げ、町に貢献する「地域づくり」へと焦点を変更し研究を進めた。

## 2.研究目的・意義

町内外に関係なく、どうすれば市川三郷が盛り上がり、観光客を増やすことができるのかを検証する。

意義として、高校生の感性で町を見直すことで、新しい視点から観光客の集客を見込むことが期待できる。本研究では「町にいる人の想いや物語」に焦点を当て、従来の観光ガイドではなかった主観的な町の魅力を伝えることができる。加えて高校生が町の広告塔となり、町に対する純粋な想いを言葉にすることで、町外だけでなく町民自身にも魅力を再発見してもらう。

## 3.研究方法

市川三郷町を発信する活動を行うにあたり、私たちは町の知名度が低いのではないかという仮説を立てた。説を立証するため、町外に住む人へアンケートを実施し、市川三郷町に対する認知度の調査・分析を行った。山梨英和中学・高等学校、山梨県庁、山梨県生涯学習センターのご協力のもと、無記名のアンケートを実施し、計532件の回答を得た。市川三郷町の知名度、来訪経験の有無、また今後の来訪意欲や観光的関心についての内容のものである。回答者は、知名度、来訪経験に関する質問に対しては二者択一式、また、祭り、特産品、観光地等の認知の質問に対しては選択式と自由記述式で回答した。

また、「ワカモノ議会」に参加し、まちづくりや地域活性化へのより深い理解を得た。これは、市川三郷町にゆかりのある小学生から高校生が、自分たちの目線から、町に必要な改革や政策を考え、実際に議会で発表していくプログラムである。計7回の活動の中で、異なる学年、地区に住む他の参加者とのディスカッションを重ね、新たな視点から市川三郷を見ることで、主体的かつ独自の発想を養った。

また、計9回のフィールドワークを実施した。和紙、花火、ハンコなど、町の伝統文化に携わる職人4名へのインタビュー、「和紙おり染め体験」などを通し、実際に古くから町に息づく文化の魅力を体感した。さらに、四尾連湖や大門碑林公園、歌舞伎文化資料館など観光地・施設を訪れ、町民や施設の方の市川三郷に対する思いや視点を伺うとともに、その観光地・施設にしかない特性を発見した。

これらの活動から、雑誌「#きっと、市川三郷が好きになる。」を作成した。16回市川三郷町に通い、発見した魅力「自然・歴史・町民の方々の温かさ」を町外へ伝えることが目的である。また、町民の方に町に愛着を持ってもらうことも目的の一つであり、全ての人に愛される雑誌を目指した。取材・写真撮影・執筆・編集はすべて自分たちで行った。公式サイトでの引用ではなく、私たちが感じた市川三郷町を言葉にしてデザインし、細部までこだわり抜いた一冊である。

#### 4.研究結果・考察

3月17日に校内で研究発表会があり、そこで様々な方に雑誌を見ていただき、多くのフィードバックを得ることができた。取材・写真撮影・執筆・編集を自分たちで行ったことを評価していただいた。また「市川三郷町に行きたくなくなった。」「実際にこの雑誌を持って市川三郷町に行きたい。」などのフィードバックを得ることができた。しかし、雑誌はどうやって広めていくのか、今後資金はどうやって集めるのかなどのご指摘もいただき、課題が明確となった。

また、雑誌を制作するにあたり、総勢21人へのインタビューを行った。それにより、町外に魅力を伝えることができ、町内でも町民の方々が町の良さを見直すきっかけになったと考える。意義のとおり、町外町内共に影響を与えることができたのではないだろうか。

#### 5.結論・今後の展望

まずは町外の方に雑誌を読んでもらう、読む前と読んだ後では市川三郷町に対する意識はどう変わったかなどの効果を検証するアンケートを実施したいと考えている。また、研究発表会で見つかった課題である、雑誌の設置場所や資金面について、行政にも相談しつつ検討していきたい。

#### 6.引用文献

- 1.市川三郷町公式ホームページ(<https://www.town.ichikawamisato.yamanashi.jp>)
- 2.市川三郷町第3次総合計画